

現代イギリス英語における引用導入表現 *be + like* と *say* の比較

－出現可能な文法的環境の観点から－

溝上瑛梨(京都大学大学院生)

1. はじめに

本研究では、直接話法を導入する *be + like* と *say* について、両者の使い分けがどのようになされるのかを検討する。引用導入表現としての *be + like* は、最近数十年の間に広まった新たな用法であり、他者や自己の発話を引用するという点で、従来の伝達動詞 *say* と類似する働きを持つため、何らかの使い分けがなされていることが予想される。そこで、現代イギリス英語での会話中に現れた *be + like* と *say* の用例について、出現した文法形式を比較し、新規表現 *be + like* と従来の表現 *say* の使用域の差を明らかにするのが、本研究の目的である。

2. 引用導入表現としての *be + like*

まず引用導入表現 *be + like* の働きについてまとめる。二つの語、*be* 動詞と *like* を組み合わせて、直後に直接話法が続くことの標識とする引用 *be + like* の用法は、1980年代にその存在が指摘された新しい表現であり、もっぱら口語表現に見られる(Singler, 2001)。主語の数や時制、アスペクト等に合わせて *be* 動詞は変化し(D'Arcy, 2017)、*say* や *think* と同じ位置で用いられ、発話・思考の直接話法を引用するのが *be + like* の機能である(Romaine & Lange, 1991)。

- (1) a. The surgeon at the time was like, “Yeah, your bone is actually like honeycomb and mush.”¹
b. (...) he was like, “I don’t know if I’m, that this level. I don’t think I’m good enough to carry on doing this and succeed at it.”

(1a)においては、話し手が、病状について説明をする医師の発言を *be + like* により引用している。よって、例文の“was like”は“said”に置き換え可能である。また(1b)では、話し手が、その兄について語っている場面である。兄が大学在学中に考えていたであろうことを推し量り、その思考を直接話法で表現している。したがって、例文の“was like”は“thought”に置き換えられる。このように、引用導入表現としての *be + like* は、発話・思考を直接話法の形式で引用し、文中で *say* や *think* が占める位置で用いられる。

アメリカ英語で用いられ始めた、引用導入表現 *be + like* は、今日ではイギリス英語においても頻繁に使用される。会話表現として広く用いられるようになった *be + like* であるが、直接話法を導入する表現には、既に伝達動詞 *say* が存在し、同様の機能を有する表現形式が併存していることになる。したがって、*be + like* と *say* に関して、話者の中で何らかの使い分けがなされている可能性がある。本研究では、従来の伝達動詞 *say* と新規表現 *be + like* が、それぞれ生起できる文法的環境を比較することで、両者の差異の一端を明らかにし、背景にある *be + like* の用法の制限について考えたい。

3. データ

考察の前に、本研究で用いたデータについて説明する。使用したデータは全て、動画共有サービス

¹ 本発表で使用している例文は、特に記述がない限り、発表者が集めたデータ(3節を参照)より抄録しているものとする。

YouTube にアップロードされた動画より採集した。自然会話でのイギリス英語の用法を観察するために、British Broadcasting Corporation (BBC) が配信する動画、およびイギリスを拠点に活動するクリエイターが手がける動画で、近年(2016年～2018年)に制作・配信された、合計約5時間30分の10本の動画を分析した。これらの動画は、ドキュメンタリー、インタビュー、クリエイターの日常生活の紹介、出版記念トークイベント、旧年の振り返りや胸中を語るモノログを扱うものとなっている。これらの動画から、直接引用が行われている箇所を抜き出し、合計302例の直接話法による引用例が得られた。このうち、*be + like* による引用は124例、*say* は78例あった。ここで得られた用例に基づき、次の節より、*be + like* および *say* が出現できる文法形式を比較し、両者の使い分けについて考察したい。

4. 出現できる文法形式

4.1 用例の概観

次に、データより得られた *be + like* や *say* の用例が出現した文法形式を分類した。まず124例あった *be + like* の文法形式をまとめる。引用 *be + like* が単体で用いられる場合は、過去形 (e.g. I was like)...78例、現在形 (e.g. I'm like)...31例、分詞構文を含む現在分詞形 (being like)...7例となった。さらに、*be + like* が他の文法要素と組み合わせられた例は、助動詞との共起 (e.g. I'll be like)...8例となった。

続いて78例の *say* が出現した形式についてまとめる。単体で用いられる場合、過去形 (e.g. I said)...45例、現在形 (e.g. it says)...9例、現在進行形 (e.g. I'm just saying) ... 3例、分詞構文を含む現在分詞形 (saying)...8例となった。次に、*say* が他の要素と組み合わせられた場合は、助動詞との共起 (e.g. you can't say)...5例、*to* 不定詞形 (e.g. I happened to say)...6例、動名詞形 (e.g. I love saying)...2例となった。

引用 *be + like*、伝達動詞 *say* の両者とも過去形の用例が最多で、次に現在形が多い。それ以外の形式はいずれも少数であるが、*say* は *to* 不定詞形や動名詞形で現れることができ、この点で *be + like* と異なる。以下、各用例を観察した結果をもとに、*be + like* と *say* の使用域の違いについて示唆を述べる。

4.2 引用 *be + like* が出現を制限される場合

ここでは、得られた *be + like* と *say* の用例の比較より確認できた二点について考察したい。すなわち、(i) 引用 *be + like* の仮定法での不使用、(ii) 引用 *be + like* の *to* 不定詞での不使用である。そして、仮定法および *to* 不定詞が表す意味と併せて検討し、引用 *be + like* と伝達動詞 *say* の使い分けの指標について議論したい。

4.2.1 仮定法

まず、今回得られた124件の引用 *be + like* の例では、仮定法の *if* 節での使用が確認されなかったことについて考えたい。引用 *be + like* の各用例を調べると、仮定法ではない *if* 節での用例は見られたが、仮定法の *if* 節では *be + like* の代わりに *say* が用いられていた。以下に、それぞれの例を挙げる。

- (2) a. If I was like, “Yeah, sure, buy my T-shirt. Just take it off now,” like (...)
b. If I said, “I’m coming out gay,” people would be like, “This stuff definitely a joke.”

(2a)は仮定法ではない *if* 節で引用 *be + like* が用いられた例である。ある男性から、自身が着用中の衣服を買い取りたいと申し出られて断った際に、もし了承していたらどうなっていたか、と語る場面である。

(2b)は仮定法の *if* 節を含む例である。実際はそうではないが、もし自分が同性愛者だと公言したら、人々がどんな反応をするかについて、仮定法過去を用いて述べている。この例文では、従属節においても主節においても、他者や自己の発言を直接話法で表しており、それぞれ異なる引用導入表現を用いている。Singler (2001)によると、同一ターン内では、一度使用された引用導入表現が継続して選択される傾向にある。例文の *if* 節の直前では、引用 *be + like* が用いられていることもあり、本来は(2b)の二箇所の引用においては一貫して *be + like* が用いられる可能性が高いと予想されるが、実際には、用いた表現が異なっている。(2a)のように直説法の *if* 節では *be + like* が使用されていることを鑑みると、仮定法の *if* 節で

の引用 *be + like* の使用が難しいために、話者は伝達動詞 *say* に切り替えた可能性が考えられる。そこで、仮定法について概観しておきたい。

仮定法とは、述べる文の内容が反現実(事実に反すること)や非現実(起こる可能性が低いこと)を表すムードである(Leech, 2004; 中野, 2016)。Leech (2004)によると、仮定法過去や仮定法過去完了は仮定的な意味(hypothetical meaning)を表し、現実とは異なる、あるいは現実に反する出来事を記述するものである。よって、消極的に真実を志向するもの(negative truth-commitment)とされる。このように仮定法過去や仮定法過去完了が表す、実際とは異なる、または実際に起こったことに反する出来事の記述とは、出来事の生起の不確性、あるいは生起の否定を表すとも言えるだろう。

ここで、仮定法と引用 *be + like* との関係について考えたい。仮定法ではない *if* 節では引用 *be + like* が共起できて、仮定法の *if* 節では共起できない理由は、仮定法が出来事の生起を否定したり、可能性が低いことを表すからだと考えられないだろうか。つまり *be + like* は、引用する発話や思考が確実になされたことが示される場合に使用でき、この点が *say* との使い分けになっているのではないだろうか。

4.2.2 *To* 不定詞

4.2.1 節で述べた、引用 *be + like* と発話・思考の生起の確実性との関係は、*be + like* が *to* 不定詞形で使用されないことから支持される。というのも、得られた用例では、引用 *be + like* は助動詞 *will* とは共起できるが *be going to* の形式では使用されておらず、したがって *be + like* が *to* 不定詞形では出現できない可能性が浮上するからだ。Duffley (1992: 19)は、*to* 不定詞が表す二つの意味を挙げている。すなわち、(i) 実現されない、またはまだ実現されていない出来事 (e.g. He tried to get free.), および、(ii) 実現された出来事 (e.g. He managed to get free.)である。これらのうち、どちらの意味になるのかは、*to* の前に来る語句と *to* の後の不定詞との関係や、話し手の想定により決まるといふ。

次に、今回得られた *to* 不定詞で伝達動詞 *say* が用いられた例を挙げ、その表す意味を考えたい。

(3) a. (...) I'm kind of running out of like a, a new way to say "Thank you."

b. And when I did this, I happened to say "Me and Phil did this," or "Me and Phil did that."

(3a)は Duffley (1992)の言う(i)の意味に相当するだろう。話し手は、過去の発言を引用しているのではなく、これから“Thank you”と他者に伝える言い方について模索しているからだ。一方、(3b)の例は(ii)に当たると考えられるが、完全にこの意味に当てはまるとは言い切れない。(3b)では、話し手が“Me and Phil”という非標準的な言い回しをした際、他者から訂正を受けたことについて語った場面である。ここでは、過去の発言をそのまま引用しているわけではない。実際の発話では、“Me and Phil did that”のうちの“did that”の部分に具体的な行為の表現が来ていたはずである。しかし類似の発話をするが多かったため、その複数の発話の述語部分を“did that”でまとめて発話を再構築している(constructed dialogue, Tannen, 1986)と考えられる。よって、直接話法部で表されているのは、実際にはなされていない発話の引用となる。そうすると、(3b)の *to* 不定詞の意味は「実現された出来事」から逸脱し、「まだ実現されていない出来事」に近づくだろう。今回得られた、*say* を *to* 不定詞の形で用いた例は全て、このように「まだ実現されていない出来事」の意味を表すものであった。したがって、仮定法の *if* 節の場合と同様、ここで得られた *to* 不定詞の例についても、出来事の生起を否定、あるいはその可能性が低いことを表すものと言える。よって、引用 *be + like* が *to* 不定詞形で出現しなかったのは、この文法形式が含む、出来事の生起の否定や可能性の低さに起因すると考えられるのではないだろうか。

以上、仮定法の *if* 節、および *to* 不定詞での引用 *be + like* の不使用を考察し、その理由について、これらが出来事の生起の否定や、生起の可能性が低いことを含意する文法形式であることを指摘した。出来事の生起とは、この場合、引用される発話や思考が実際になされたことを指す。記述する出来事の生起の確実性については、*say* と比べ *be + like* が否定文や疑問文で用いられる頻度が低いという Singler (2001)の報告とも両立する。今回集めたデータにおいても同様の傾向が見られ、引用 *be + like* が否定文や疑問文で使用された例はなく、*say* の場合は、否定文が2例、疑問文が1例、確認できた。否定文は、当然ながら、その文で表す出来事の生起を否定するものである。また疑問文は、出来事の生起について聞き手に問うものであり、したがって、基本的に生起の可能性について中立だと言えるだろう。このことか

らも, *be + like* は引用する発話・思考が確実になされた, と含意される環境が必要であるとの示唆が得られ, この点が伝達動詞 *say* との使い分けの基準になっていることが支持されるだろう。

5. 結論

本研究は, 現代イギリス英語について, 直接語法を導入する *be + like* と *say* の使い分けに関し, 出現可能な文法形式という観点から考察した。引用 *be + like* は出現できないが伝達動詞 *say* には可能な形式として, 仮定法と *to* 不定詞が挙げられ, これらの文法形式が表す意味を鑑みた結果, *be + like* は引用する発話が確実に生起したと含意される形式でしか使用されず, この点が *say* との使い分けの指標となっている可能性を示した。今回扱ったデータでは用例数が少なく, 今後はコーパス等を用いての分析が必要だが, 本研究は, これまで使用者の特徴に焦点が置かれてきた *be + like* 研究に, 文法形式という観点での使用の拡大や文法化の程度の検討という, 新たな視座を加えるものである。

データ

- BBC Three. (2017, February 27). *Young & sterile: My choice, extraordinary bodies* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=bYy6n8B9OtE>
- BBC Three. (2017, September 24). *Diabulimia: The world's most dangerous eating disorder* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=tSLjM6cZaTo>
- BBC Three. (2017, November 12). *Student suicide: Real stories* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=wJ4BMrxflLA>
- BBC Three. (2018, August 11). *Parkour changed our lives* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=W06o3SfUxdc>
- Howell, D. J. [Daniel Howell]. (2016, November 4). #DAPGOOSE: *The Dan and Phil go outside on stage event* [Video file]. Retrieved from https://www.youtube.com/watch?v=zYcJ4N_idS0
- Howell, D. J. [Daniel Howell]. (2018, January 14). *The top Dan memes of 2017* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=yHHnywiSwIE>
- Lee, C. R. G. [Caspar]. (2017, July 31). *KSI: Life after YouTube (honest interview)* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=uJGsWUd2haM>
- Lee, C. R. G. [Caspar]. (2018, January 8). *Conor Maynard: On fame, Logan Paul & his brother's scandal (honest interview)* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=14AtQGTM6Q>
- Sugg, Z. E. [Zoe Sugg]. (2018, June 29). *Beach time & couple drama* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=grZzLTmI2mE>
- Sugg, Z. E. [Zoe Sugg]. (2018, August 27). *What I've been up to recently: Weekly vlog* [Video file]. Retrieved from <https://www.youtube.com/watch?v=hJKAruaMGSg&t=274s>

参考文献

- D'Arcy, A. (2017). *Discourse-pragmatic variation in context: Eight hundred years of LIKE*. Amsterdam: John Benjamins.
- Duffley, P. J. (1992). *The English infinitive*. London: Longman.
- Leech, G. (2004). *Meaning and the English verb* (3rd ed.). Harlow: Pearson Education.
- 中野清治 (2016). 英語仮定法を洗い直す 開拓社
- Romaine, S., & Lange, D. (1991). The use of *like* as a marker of reported speech and thought: A case of grammaticalization in progress. *American Speech*, 66(3), 227-279.
- Singler, J. V. (2001). Why you can't do a VARBRUL study of quotatives and what such a study can show us. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 7(3), 257-278.
- Tannen, D. (1986). Introducing constructed dialogue in Greek and American conversational and literary narrative. In F. Coulmas (Ed.), *Direct and indirect speech* (pp. 311-332). Berlin: Mouton de Gruyter.